慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三浦梅園の経済論
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.7 (1948. 7) ,p.365(1)- 387(23)
JaLC DOI	10.14991/001.19480701-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高村象平著
一般經濟史 古代・中世
A5上製二〇四頁 價二〇〇圓 〒二〇圓
われわれ亞細亞人としての立場から、全人類の經濟生活の發展を省察した經濟史
内容要目 第一章 古代（第一節 原始社會 第二節 氏族社會と古代村落 第三節 東洋農耕社會 第四節 西洋社會） 第二章 中世（第一節 東洋社會 第二節 同 教社會と東歐社會 第三節 西歐社會）

千種義人著
經濟原論 總說
A5上製三四六頁 價三〇〇圓 〒四〇圓
最新の學的成果と最鮮の歴史的意識とを以つて、しかも初學者への理解を念頭にして書き下ろされた。本書は總說として、經濟及び經濟學の基礎概念を明かにし、續く各論への基石を築かうとする。とはいへ、現在の經濟を分析し將來の經濟への觀望を怠らぬ廣い視野は、この總說のみを以つてしても、優に資本主義經濟の現段階を明確に握み、今日の經濟理論を我有となし得るであらう。

社版出應慶

三田學會雜誌 第四十一卷 第七號 昭和二十三年七月

三浦梅園の經濟論

野村兼太郎

一

三浦梅園は「玄語」「贅語」「敢語」、所謂梅園三語の著者として、その哲學的創見を以て有名であるが、又經濟論においても、グレッシャム法則の發見者として早くから學者の注意するところとなつてゐた。しかしその經濟論は當時において特に異色あるものといふことは出來ない。何れかといへば、後に述ぶるが如く、當時最も一般に行なはれてゐた議論以上に出づるものではない。

それにも拘らず特にここに梅園の經濟論を採り上げて考察しようといふのは、彼の哲學のうちに現れてゐる研究方法との關聯を明かにしてみたかつたからに外ならない。彼の學問研究の態度は當時としては頗る異色あるものであり、又近世的合理主義の實證的立場と一致するものがあるからである。

彼は人が物の本質を明かになし得ない理由を考察して、人間が俗習に染み、疑ふべきことをも疑はざるがためであるとし、次ぎの如くいふ。

「蓋人之爲レ生。必染レ於レ所レ習。染レ於レ所レ習。則失二所一レ素。是以。俗習之蔽。學二之疵鍼一。學習之蔽。殆擲二藥石一。

染」之也易。素」之也難。蔽」之也易。復」之也難。夫因循薫蒸之久。猶臭人之不」臭其臭。屠人之不」羶其羶」數髮簡」毛。非」說之不精微。超」天越」地。非」教之不廣大。惟各德其所得而有。道其所由而行。拾」珠而遺」玉。惡珷玞而素瓊瑤」異同紛綸。一護一訐。各據其門。各守其戶。區域相畫。是非互殊。於」是乎。或相睨視。或相仇讐。學習之所以蔽人之聰明。病人之才力也……」

これは彼の代表的著作「玄語」の劈頭にいふところであるが、學者が己が學ぶところに執著して却つて事實を明白になし得ない所以を指摘したのである。「玄語」は稿を改めること二十三回といはれ、梅園の沈思推敲の成果であるが、その敍述はわれわれに決して親しみ易いものではない。彼が多賀墨卿に與えた答書において、彼自身その學問的立場を說明してゐる。

「天地の條理にいたりては、今に徹底と存する人も不承候、かく廣き世の中に、かく悠久の年月をかさね、かく數限なき人の考慮を費して、日夜に示して隱すことなき天地を何故に看得る人のなきとなれば、生れて智なき始より只見なれ聞馴れ觸なれ、何となしに癖つきて、是が己が泥みとなり、物を怪しみいぶかる心萌さず候、泥みとは所執の念にして佛氏にいはゆる習氣にて候、習氣とれ不申候事は何分心のはたらき出來らず候」（「梅園拾葉」卷中、梅園全集下卷八三―四頁）。

學んで學派に執著すると同じく、見馴れ聞馴れた事物に對しては少しも疑惑を起さない。珍奇なことに疑念を抱くよりも、當然のことに懷疑の目を聞くことが必要である。

「石物いふといふとも、夫より己が物いふを怪しむべし、枯木に花咲たりといふとも、先づ生木に花さく故をたづぬべし、かく物に不審の念をさしはさまば月日のゆきかへり、造花の推遷るは更にして、己が有と占め置ける目のみべ耳のきこゆるも態をなす手足も物をおもふ心も、ひとつとして合點ゆきたる事はあるまじく候」（同上、八六頁）

目は見える筈、耳は聞える筈、重きものは沈む筈と初めからきめて疑ふことをしない。

「此故に世の人の天地をしらざるは慣れ癖に貪着なく習氣を秘藏する故にて候。是に因て天地を達觀せんと思召て、平生慣れて常とする事を疑の初門とし、觸るる事悉御不審を起され、我かくおもひかくうたがふもの、もと人なれば人の執氣ある處を御かへり見有べく候」（同上、八七頁）。

すべてのものに疑惑をもち、一切の習氣を脫せんとしても、元來人間であるから人間として習氣を脫することが出來ない。書物の如きもむかしの人がその見る所を書いたのであつて大習氣の種である。前に述べた學派の如きはその甚だしきものである。かく捕はれたる一切の立場を棄て去つても、なほ人として捕はれざるを得ない。梅園は純粹に客觀的な捕はれざる立場を求むべきであるとした。

「天地はむかし新しき天也にもあらず、今古き天地にもあらずいつもかわらぬ無鹽にして、我爐中の火卽萬里の外の火にして、我盆中の水卽千古の前の水なれば、此天地をしり、此水火をしらんとならば、先此無鹽に試みて、傍書籍に參考し、あはざる處を置き、あふ處をとるべし、此故に天地達觀の位には、聖人と稱し佛陀と號するも、もとより人なれば、畢竟我講求討論の友にして、師とするものは天地なり」（同上、八八―九頁）。

かく彼は天地を觀察することに依つて眞實を明かにせよといひ。彼の天地といふのは一切萬象を包含する。時には自然といつてもよい。そしてここに彼獨特の哲學を展開する。彼自ら彼自身の思索の過程を述べて曰く。

「晉（梅園）自垂髫。所觸總疑。解者咻耳。夢寐之語難徵。思念塞胸無權之衡作偏。人之言曰火陽也。故熱。水陰也。故寒。晉則以爲陽者奚爲熱。陰者奚爲寒。人之言曰。陽輕而升。陰重而降。人之思也。至此而止。晉之疑

也。於レ是已甚。隆然烏者何爲視。邃乎谷者何爲聽。晉則不レ能レ釋。不下得二己之所一得而有二而有一之者。非レ之。不下由二己之所一由而行一而行一之者。外レ之。人則於レ是能斷。晉則惑焉。人聞二諸古一。得二諸書一便言焉。晉則未レ能二全信一。於二天地一也。荒唐散漫而說。於二死生一也。恍惚曖昧而言。取二驗於一僻。懸二舌於一空。人則不レ介レ於レ意。晉則不レ能二懌然一。反覆思レ之。沈潛釋レ之。似レ有レ小親於二俯仰之間一。竟不二自量一。此有二斯述一。蓋斯述。由二一一之條理一。以取二則於二天地一。則不二敢與一古計校一。造語有レ由レ己。一氣。陰陽也。大物。天地也。世曰二方圓一。此曰二直圓一。世曰二日月一。此曰二日影一。或其命レ名也新。或其取レ義也殊。惟求下與二天地一合上。而不レ暇レ顧二定說一。惟冀人之不レ病レ於レ所レ習。以活レ於レ所レ向。而是二非之一。以二天地一。取二捨之一。以二天地一。弗下護二門戶一。畫二區域一。禦二他賢哲一。而外二此赤子一上矣。儻讀二此語一者。專證二千舊見聞一。專據二千古訓話一。則晉之獲レ罪。亦將レ多焉」（「玄語」例旨）。

彼が先哲の言に據らず、自ら自然を觀察し、これと合するものを採り、斷乎として新說を述べんとする意氣の壯なるを知ることが出來よう。今ここにその辨證論的方法ともいふべき「反觀合一」論、「捨心之所執」、「依徵於正」の議論、又「混淪鬱浮」の論を一一ここに紹介する必要はない。彼が一切の過去の所論に捕はれることなく、「條理」（論理）に依つて自然を觀察し分析せんとする科學者的態度を認め得れば足りる。その哲學論と近世哲學との關聯については、三枝博音氏の「三浦梅園の哲學」（昭和十六年版）に讓る。ここでは彼のかうした態度を生ぜしめた環境について少しく調べてみたい。

二

三浦梅園は享保八年（一七二三年）八月二日、豐後國東郡富永村に生れ、寛政元年三月十四日、六十七歲で沒してゐる。前野良澤、平賀源內等と同年である。梅園、諱は晉、字安貞、その園に梅樹が多かったので梅園と號した。又その生地に二子山あり、依つて擧山・孖山・二子山人等と號したといふ。

梅園の家は醫を業としてゐた。祖父驢山義房がその業を始め、父虎角儀一これを繼いだ。家は決して富有でなかつたことは、梅園が幼時その師綾部綱齋の門に入り、山越四里の途を通ふに常に跣足であつたので、師の綱齋が憐んで草履を與へたといふ逸話でも想像出來る。しかしこのことは今日から想像する如く極貧であつたわけではなからう。當時少年の跣足は地方にあつては一般のことであつたからである。富永村の如き邊鄙な所に生まれ、師友も乏しく、その家も貧しかつたが、その家は醫者であり、當時としては學問的雰圍氣を全然缺いてゐたわけではない。殊に祖父徹山は數學をよくし、遺著に算書二卷があつたといふ。好學の素質は祖先から受けついでゐたやうである。

彼の最初の師綾部綱齋は豐後杵築藩の儒者である。初め京都に遊び、伊藤東涯についたが、後江戸に出で室鳩巢の門下となつた。從つてその學統は朱子學派である。その後梅園十七歲の時、中津藩の儒者藤田敬所について學んだ。藤田の學統は明かでないが、梅園を愛しその職をつがしめんとしたが、父母その一子なるが故に、これを許さず、滯留三旬にして家に還つたとある。その後二十一歲の時、再び敬所の門に學んだが、その影響はあまり大であつたとは思はれない。却つて綾部綱齋から受けた影響は大きかつたやうである。綱齋の次子麻田剛立とは莫逆の友であつた。剛立は梅園より若きこと十二歲、幼より天文を好み、長じて天文曆術及び醫學を以つて一家をなした。しかし梅園が天地造化に疑ひを抱くやうになつたのは二十歲の頃であるといふから、剛立が梅園に影響したといふよりも、むしろ梅園が剛立に影響を與へたとみるべきであらう。後年兩者の學問的交遊において、梅園は天地の條理を說き、剛立は乾象の實態を明かにし、互に啓發さるること大であつた。

梅園は綱齋の程朱の學をそのままに遵奉した者でなく、むしろ自家獨特の條理學を主張したことは、前述の如くであるが、彼が綱齋の著「家庭指南」を六十三歳の時に飜刻してゐることは注意すべきである。

「家庭指南」は「父子有」親、君臣有」義、夫婦有」別、長幼有」序、朋友有」信」を解說した片片たる小冊手に過ぎないが、この人倫の道を維持することが人間と禽獸との差異を示すものであるとする。

「所謂人之道倫理是也、故聖人之敎、以」明倫理」爲」本、學問之道、以」知」之爲」先、夫古今之久、莫」世不」有」人倫」、天下之廣、莫」事不」由」人倫」」

梅園は勿論これを是認してゐる。ただ綱齋が單に倫理として簡單に片づけてゐる點を、さらに分析し、情慾意智とし、これが運營の如何に依つて人間と禽獸との差違を生ずるといひ。次ぎの如く論ずる。

「一氣流」形、爲」物爲」人、仰觀俯察、惟人爲」靈、儔諸庶物」、惟此有意、擇諸有意」、孰靈」於」人、夫天地無」私、奚獨人靈、蓋各有」所」長矣、靈者、神之靈也、情慾意智、以運用管施、情慾意智、含靈各具」之、而我長」于」玆、彼短」于」玆、長則明矣、短則罔矣、情慾感應也、意智知運也、感應者、愛憎慾惡也、知運者、思慮知辨也、惟物者、罔」于」所」思慮知辨」、而徑行」其所」感應」焉、雖」徑行」其所」感應」、而不」宿」諸思慮之念」、不」得」諸知辨之運」、頑然處、冥然行、禽獸之所」禽獸」也、人者、宿」諸情」、辨」諸智」、蓋宿」諸情」、則好惡推擴而感應愈廣、辨」諸智」、則思辨計校、而運爲益明、有」所」推擴」、則感」甲念」乙、故愛好、擴」之爲」善、憎惡肆」之爲」惡、有」所」計校」、則擇」一舍」一、處置得」宜」之爲」是、處置失」當」之爲」非、思得」善惡」辯」是非」、此心惟人有」之、人之貴也、故思之隱、以種」仁、辨之差、以生」義、苟無」所」隱差」、禽獸奚擇」」（「散語」序）。

その議論の精緻な點は到底綱齋の及ぶところではない。意智の働きが思辯計校する力をもち、その點に人間の禽獸と異なる所以を求めたことも、當時として異色あるものである。しかしその倫理的歸趨は綱齋と同じく、

「內序」父子兄弟」、外正」君臣男女」、而後貴賤長幼相敬、夫婦婚姻相親、具」意智之知辨」、畜」情慾之感應」、勢不」得」不」然矣」（同上）

とし、大體當時の社會的秩序を容認してゐる。このことは必ずしも綱齋の影響といふ必要もないが、崎齋の著書を覆刻することに盡力した所以であらう。

彼の學問研究の態度を決定するに際し、延享三年、二十三歳の時の長崎行がどれだけの關係があつたか明かでない。天地自然の現象に疑惑をもつた梅園が當時洋學の唯一の源泉であつた長崎に遊んで、何ら學問上の資益がなかつたとは考へられない。しかし何ら具體的な證跡はない。「梅園詩集」卷之上にある「長崎贈」大潮禪師」時余歸期已逼」はこの時の作かと思ふが、

「掌上美珠照」衲衣」、　江山攜處有」光輝」、
先容已識」如」明月」、　步至」龍淵」空」手歸」」

手を空しふして歸るとは何を意味するか、今これを明かにすることを得ない。大潮禪師についても未だ考へない。

梅園と同年の蘭學者、蘭化前野良澤が中津藩の官醫であり、梅園も亦二度もその師藤田敬所を中津に訪ねてゐる。蘭化の名は恐らく梅園の知るところであらう。しかしその學問的交渉については全く知られてゐない。

かく梅園の學問の系統において、彼の科學的研究方法を誘導したと思はれる先行者は殆ど見られない。しかしわれわれは當時の時代的傾向を考へる時、彼のやうな學問的方法がこの時に生れたことを偶然とは思へない。享保の末年から寶曆・明和、所謂田沼時代にかけて蘭學の勃興したことは異常なものがあり、又國內に於いても合理的觀念の發

展の著しいものがある。一般の考へも、貨幣經濟の進展につれて著しく現實的になつてゐた。その弊害も少なくなかつたが、他面合理思想發展の一般的基礎を作りつつあつたといつてよい。

豐後の片田舍、富永村の一青年が天文學の書を讀みながら、自ら觀察し、自ら天球儀の創作に熱中してゐる時、殆ど時を同じうして將軍吉宗が自ら渾天儀を作り、江戸神田に天文臺を築いた。時代の風潮を窺ふことが出來よう。

同じ時代に生きてゐた人人、前述の同年の前野良澤や平賀源内の外に、杉田玄白、本多利明、本居宣長、小野蘭山等を思ふと、そこに相通ずるもののあることことを感ぜざるを得ないのである。

しかし梅園は西洋學に滿足してゐたわけではない。その巧妙精緻なことを認めても、それに飽き足らなかつたのである。前掲多賀墨卿に答ふる書においても、

「尤天文地理天行の推歩は、西學入して段段精密にいたり候へ共、それはそれ切にして天地の條理にいたりては、今に徹底と存する人も不承候、」

梅園再度の長崎行は安永七年五十六歳の時であつたが、通事吉雄耕牛、松村翠崖等と交り、單に天文曆學等の自然科學方面ばかりでなく、西洋の風俗人情制度等の知識をも得たのであつた。詳細はその著「歸山錄」二冊に記されてゐる。その後吉雄耕牛から顯微鏡を贈られ、大いに喜び、長詩を賦して感謝の意を表してゐる。

「天爲圓蓋地爲輿、造物載我御此車、從來此車人不識、模索漫費汗牛書、海西機巧天下危、上窺九天下四維、製造巨艦衝風濤、不隔扶桑與咸地、衆星七曜指掌看、五帶六洲一彈丸、萬國動靜爲偵報、朝宗至今許和蘭、憶昨嘗遊瓊浦秋、縱飲耕牛先生樓、先生愛客開盛宴、葡萄美酒白玉舟、邏巴百物逐次陳、經營不同東方人、字似岣嶁神禹碑、畫能飛動勢逼眞、先生胷中呑太洋、爲我苦說海西狀、禮樂政刑百制度、曆史醫禱殊意匠、還家每憶此歡語、實感仙遊不可亟、先生知我心醉此、遠寄西圖一幅至、輕裝深目鞭鐵驄、郭門望覺恍入空、非君天風假羽翼、焉使人在西洋山水中、」（「梅園詩集」卷之下）。

題して「謝吉雄耕牛惠西洋管窺鏡圖」とある。顯微鏡を通じて細畫を擴大して見たものでもあらうか。

かく梅園は耕牛を通じて西洋のことを知り、その人智の進めるを知り、又耕牛からわが北邊の危機を具に語られ、

「是に由てこれを思ふに、實にこれ西人の意測り易からず、國家防嚴に怠らず、可謂其要を得と、然して其國の人智巧萬國に勝る、よく思ふべし」（「歸山錄」上）。

と述べてはゐるが、彼自身の條理の學はすでに完成されて居り、それは單なる表面的知識ではなく、より深い學問的眞理を把握したものであるといふ大なる自信に到達してゐたのである。

三

梅園の經濟論を窺ひ得るものは、僅かに「價原」と「丙午封事」の二書あるのみである。元來梅園は三語、殊に「玄語」の完成を畢生の事業として思索し沈潛した。經濟論の如きは人の問ふことあつて、たまたま書かれたものである。「價原」は杵築藩士上田養伯の問に答へたものであり、「丙午封事」は藩主松平親賢の命に依つてその意見を具申したものである。前者は安永二年五十一歳の作であり、後者は天明六年六十四歳のことである。何れも田沼意次の放慢政策の時代を背景としてゐる。先づ「價原」について述べよう。

問題は賃銀の高騰にあつた。その序にいふ。

「今之俗、人家買貧民之失產者爲奴婢焉。有周期者、有半期者、有更日者、有累歲者、出人之候各地

有二其風一、總謂二之奉公一。蓋近年儉藏則不レ雇、而多レ不レ得二以就一食者上。豐年則直遷騰貴、而多レ不レ得二以買一奴者上。若二今年一、若以二麥價一量レ之、則健奴則上ル十石一、雖二至疲弱者一而不レ減二四三石一。然而考二其人一、則傭之勤、終不レ能レ償二其直一也。」

何が故にかく賃銀は上下するかの疑問に對し、梅園は一般に物價の根源について考察を進めたのである。「價原」の題名はそこに生じたのであらう。物價の問題を考察することは結局貨幣經濟の進展しつつあつた當時の流通社會を批判の對象とせざるを得ない。それは又貨幣の本質に言及する必要がある。梅園は劈頭に「寶」を問題とする。寶とは何であるか。

「禹謨ニ德惟善レ政、政在レ養レ民、水火木金土穀惟修、正德利用厚生惟和トイヘリ、水火木金土穀コレヲ六府ト云、正德利用厚生コレヲ三事ト云、後世之治干術萬法有トイヘドモ此六府三事ニ出ズ、……古ノ聖人ト云者ハ天下ヲ有スル人ナリ、コレヲ王者ト云、王者ノ材トスル所ハ水火木金土穀ナリ、城郭橋梁屋壁舟車耒耜釜甑刀劍陶瓦、百ノ器械、烹熟煨灸衣服飯食、何レガ五行ノ外ニ出ル。是天下ノ至寶ニシテ、得ヤスク塞ヤスク足リ易キ者ニシテ、必得難キ者ニアラズ、得難キ寶ハ寶ニアラズ、タトヒ連城ノ璧十二乘ヲ照トスモ、燈火ノ千家萬家ニ滿テ照スノ功ニ比スレバ對用スベキニアラズ、此故ニ得難キノ寶ハ得ズシテモスム者ナリ、得ヤスキノ寶ハ民生須臾モ離ルベカラザル者也、ムカシ人質撲ニシテ奢靡文飾ニ走ラザリシ世ハ是ニテ用足リタリ、世移リ俗變ジテ、次第ニ移リ飾ル世ニナリテ、得易ク塞易キ者ノ賤タルヲ忘レ、謾ニ得難ク給難キ者ヲ求メテ至寶ト思ヘリ、其至寶ハ無用ノ者ニシテ王者ノ寶ハ有用ノ者也、」

得難き寶は寶にあらずとする思想は珍らしい思想ではなく、古く山鹿素行を始め、多くの當時の論者の認めてゐるところである。要するに人間の生活に必須なものが寶であつて、然らざるものは寶にあらずとする思想であり、衣食住の基礎をなす財貨の多きは國の富む所以である。

この見地からすれば、金銀の如きはあまり重要ではない。財貨に富める世こそ眞に富むものといふべきである。金銀はなくとも生活は出來る。故に彼は云ふ。

「金銀少ケレバ世ノ中貧シク、金銀多ケレバ世ノ中ユタカナル者カト思ヘドモ、然ニアラズ、コヽニテ得ト天下ノ至寶ハ六府ニ過ザル專ヲ察スベシ、」

「先天下ノ勢ヲ慮ル人ハ能財ノ有用無用ヲ辨知スベシ、譬ヘバ海內ニ如此澤山ニ充ル所ノ金銀今悉ク果テタリトモ、他ノ五材アラマシカバ、民生立ヌト云事ノ有ルベキヤ、」

これも亦一般儒者の說くところと何ら變るところはない。勿論金銀といへども五金の一種である。梅園は金銀銅鉛鐵の五金のうちで鐵を以つて至寶とし、銅鉛はこれに次ぐものであるといふ。金銀はあればあるだけの用はあるが、なければなくてもよい。故に鐵は神代からあるが、その他の金は後れて發見されてゐる。梅園のこの議論は山鹿素行のたいからの議論を想起させる。物の流通性を以つて寶とした素行は米に次いで金銀を寶としてゐる。物の實用性に重點を置いた梅園は金銀を下位に置いた。（拙著「德川時代の經濟思想」山鹿素行の項參照）。

然らば金銀の用は何か。

「金銀ハ諸貨ニ易ヘテ用ユルヲ以テ其用トス」

即ち金銀の用は貨幣たることにある。從つて錢もこれに含まれる。貨幣とは如何なるものか。梅園の見地からみれば、それは單に交易媒介の手段に過ぎない。金銀の多少は有國者の問題にはならない。

「夫金玉ハモト土石ノ精英ニシテ得難ク朽難シ、是ヲ以テ至小以テ大ニ對スベク、米粟布帛諸貨ノ擁塞ヲ通ズベシ、神農日中爲市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所而貨通、トイヘバ、其由テ來ルコト最遠シ、然シテ諸貨ノ能スル所ハ金銀ノ能セザル所ランテ、金銀ノ能スル所ハ諸貨ノ能セザル所アリ、（この論法は梅園の條理學の適用である）、是レ以テ諸貨ハ物大ニシテ數積ム、運漕甚難シ、金銀ノ用トスル所ハ則鎭西ノ米粟舟車ヲ假ラズシテ關東ニシテ炊グベシ、北陸ノ布帛牛馬ニ駄セズシテ南海ニシテ衣ルベシ、此故ニ行旅ノ人萬里糧ヲ裹マズ、腰纏ノ用車馬ト敵スルコトヲ得、諸貨ノ如キハ通利惡シキ程ニ、米ハ衣ト成難ク、衣ハ薪ト成難ク、金銀銅錢ノ小物ハ分ツテ用ユベク、大物ハ聚メテ償フベキノ自在ニ如ザル事遠シ、是天下之靡然トシテコレニ向フ所ナリ、」

貨幣はかく便宜なものであるが、多ければ多いで、少なければ少なくて釣合ふものである。例へばある島に一萬の錢があり用をたしてゐたところへ、十萬の錢に増せば單に物價が十倍に騰貴するだけである。しかしそれに應じて弊害を生ずる。卽ちその多き金銀について游手を増し、天地より生ずる財を費す者を生ずる。金銀、卽ち貨幣は本來無用のものである。

「此故ニ天下ノ權ヲ執テ經濟ニ心ヲ用ユル人ハ有用ノ貨ヲ日日ニ生殖シ、無用ノ貨ヲ貴バヌ樣ニ致スベキ事ナリ、」

師ち梅園に依れば、貨幣は流通の上甚だ便利なものであるが、その多きに失すれば必ず弊害を生ずる。かつ動もすれば片より易いものである。

「古ヲ稽ヘ今ヲ察スルニ、金銀當今ヲ盛ナリトス、然シテ金銀ニ窮スルモ今ノ如キハナシ、故ニ人人相アヘバ唯金銀ノナキヲ語ル、天下ニ通ジテ人皆金銀ノナキヲ語ラバ、何ノ處ニ隱ルルトスル、試ニ今金銀ノアル處ヲ索ルニ、諸侯ノ國ヨリシテ士農工共ニ金ヲ畜ヘズ、然ラバ則商賈ニアルコト知ルベシ、」

何が故に商賈に金銀が集まるのか。この點について梅園は根本において二つの立場を考へてゐる。一つは「經濟」であり、他の一つは「乾沒」である。前者は民生に有用なる財の利を計ることであり、後者は私的利益を獲得せんとすることである。

「乾沒ト經濟ト同ジク利ヲ求ムル者ナリ、其差別商賈ハ利ヲ以テ利トス、經濟ハ義ヲ以テ利トス、」

治國者は勿論經濟の立場に立たなければならない。然るに貨幣の便利なことのために、すべての者が貨幣的利得を獲得せんとする。その結果は貨幣を増加したり、惡幣を鑄造したりする。

「昇平ノ世ノ中ニシテ唯苦シムコトハ金銀ナレバ、上下ヲシナベテ唯一心專念金銀ニアリ、ココニ於テ其形ハサマザマカハレドモ、心ハ何レカ乾沒ニ在ラザラン、」

金銀を有して豐饒なりとするのは商賈である。すべての者がさうした考へをもつやうになれば、富有なる商賈はますます有利である。高利を以つて人人に貸し、遊手にして巨萬の富を積むことが出來る。

「金銀愈多クシテ富家ハ則愈金ヲ積ミ、貧家ハ則愈債ヲ重ネン、惡幣盛ンニ世ニ行ハルレバ精金皆隱ル、（この一句所謂グレッシャム法則の意なりとして有名である）夫富家大ナナル者ハ巨萬ヲ儲ヘ、小ナル者ハ數金ヲ儲ヘ、小家ハ數金ノ家ニカリ、大家ハ巨萬ノ家ニカル、借ル者ハ本錢ニシテ收ル者ハ息ヲ幷ス、小民ノ數金、大人ノ數萬、其勢侔クシテ同ク富家ノ爲ニ金銀ヲ歐者ナリ、」

さて最初の問題に歸つて、かかる狀態になると、何故奉公人が動搖し、賃銀は上下するのか。

富者が遊民同樣な生活をし、その奢侈な生活を維持するために、多くの勞力を浪費させる。地方の民は都市に集中する。地方の重要な布穀等も都市に輸送せられ、富者の手に入り、地方には少しの剩米もない。貧民は皆本業を捨て

て金銀を得んとして都市に赴く。國の寶ともいふべき重要生産物の生産は減少せざるを得ない。

「此故ニ郡縣布粟ニ餘計ナク、都會積聚蠹蝨アリ、穀ハ滿易シテ減リ易シ、サルニヨツテ一年年登レバ（豐作なれば の意）天下ニ穀滿ツ、一年年儉ナレバ郡縣穀盡クヽ滿レバ人人糧乏シカラヌ程ニ、各職ニ就テ本業ニ歸セシコトヲ思フ、盡レバ糧ニ仰グ所ナキ程ニ、壯者ハ庸作ニ働ヒ、弱者ハ乞丐ニ働フ、本業ヲ捨テテ餘業ニ働フハ勢ノ已ムコトヲ得ザルニ出デテ其本心ニアラズ、故年登ルヲ見レバ遠容ノ歸舟ニ逢フガ如ク、餘業ヲ捨テテ本業ニ歸ラントスル程ニ、庸作スル者希ニシテ、餘業ヲ務ル者怠ル、ココニ於テ諸價皆騰貴ス、然フシテ一年穀熟セザレバ、雨後潦水忽涸ルルガ如ク又本業ヲステテ餘業ニ走ル、ココニ於テ諸價又賤シ、畢竟民一年立ニナリテ定レル業ノ働フニ足ル者ナケレバ也、」

以上が上田氏の設問に對する梅園の答案である。さらに梅園はこれが救濟策を續いて述べてゐる。勿論その結論は彼自身その劈頭に述ぶるが如く、三事六府を尊重する眞の經濟に歸ることである。

「モシ眞の太平ヲ得ントナラバ、金銀ノ通利ヲ貴バズ、餘布餘粟民家ニ畜ヘシムベシ、タトヒ惡年ニアフトモ、ミダリニ本業ヲバ失フマジ、本業ヲ失ハザレバ、價ニ貴賤ナキコトモ又格別ノコトモアラジ、」

即ち貨幣經濟があまりに發展し過ぎて、人人が貨幣的利得のみを追求するが故に、終に本業を棄つるに至るのである。もし地方郡縣を豐かにし三五年も支へることが出來るやうになれば、彼らは本業を棄てずして均衡を保つことが出來よう。

「モシ陰陽變理ノ手ヲ經テ、經界平ニ歸シテ、穀祿郡縣ニ三五年ヲサヽユルコトヲ得、富家兼併セズ、貧民本業ニ歸シ、遊手勤ムル所アリ、餘夫ヨク良民ニ左右シテ餘事ニ務ムル所アラバ、本業他業ヲ交交トラズ、物價高下アリトモ粗定準ノ有ルベキアラン、」

さうなると奴婢になる者がなくなつて、人人が却つて困るのではないか。

「スベテ物ニハ居リ合ヒト云者アリ、今ノ癖ツキタルヨリミレバ、海内皆富マバ奴婢ノ買フベキ無ク、傭作ノ人ナクシテ、却テ難儀ナルベク思ヘドモ、其居リ合ヒヲ見又故ナリ、今ノ貧民ノ一年ハ本業ニ走リ、一年ハ餘業ニ赴ク故ニ、物價騰動シテ定ラズ、本業人アリ餘業ツトムル所アラバ、四海富デ人苦ムコトアランヤ、」

しかしどうして陰陽變理の手を經て經界平に歸することが出來るか。彼は先づ物價騰貴の現象を大いに利用すべきことを指摘してゐる。

「今奴婢諸物價ノ貴賤事微ナリトイヘドモ、關係小ニアラズ、國家ノ權ヲ執レル人最心ヲ注グベキ事ナリ、庸作ノ人ノ遽ニ價ヲ增スコトハ、吾儕身ノ爲ニ憂フルコトニシテ、有國者ノ悅ブベキコトナリ、其故ハ此機ニ乘リ小民ヲシテ專力ヲ耕耘ニ歸セシメ、荒タルヲ闢キ堤防ヲ脩シ、彼寒苦ノ細民ヲシテ老タル親、馴來シ妻子ト優游セシメ、同ジク太平ノ餘澤ニ浴セシムベキ機アレバナリ、」

しかし梅園と雖も、當時すでに貨幣經濟の相當に進んだ時において、これが容易に行なはれるとは思つてゐなかつた。

「カクマデ久シク人ノ心ニ染タル金銀ナレバ、タトヒ聖人出タリトモ、一朝一夕ニ金銀ノ輕ク、六府ノ重キヲバ知シメ難カルベシ、然リトテ金銀ヲ一切ニ除キ去ヲ治ヲナセントニハアラズ、何トゾ費用多キ所ノ故如何トタヅネ、借ルベキ天下ノ源ヲ塞ギ、有金ノ家ヲシテ天下ノ百貨ヲ網スルコトヲ得ザラシメテ、諸侯ノ國小康ヲ得、四民其業ヲ樂ムコトヲ得ベシ、是平準ノ要領ナリ、」

結局梅園は實用性の高い財貨、卽ち眞の實の生産を增大し、金銀偏重の風を抑へ、均衡を得た社會を理想としてゐるのであるが、これを實現させる方法については具體的に論じてゐない。釣合ひのとれた社會とか、平準を得た社會とかいつても、それは抽象的に利用・厚生・正德の三事を實現することであり、それにはただ儉勤廉耻の風を興すより外になく、儉勤廉耻の風を興すのには禮樂の制度を立つるにあると考へたやうである。その點においては當時一般の儒者の議論と何ら異なるところがない。

四

「丙午封事」は封事としても頗る長文のものであり、細部に亙つて藩の地方民政について批判してゐる。しかし彼が「價原」において示した經濟の意義、六府三事を尊重する根本觀念には變りがない。從つて民生を尊重し、仁政を求め、勤儉を力說することも同樣である。

全文は（一）本條、（二）人心を收め言路を開き下情を達する事附點檢目錄、（三）年勞考課、（四）軍國の用、（五）檢見、（六）返號借、（七）因循して貴下に流るゝ事、（七）下方の義不知召やと奉存候事、（八）御法行れさる事、（九）國害、（一〇）富國の術から成立つてゐるが、今一一これらについて說明する餘裕もなく、又その必要もあるまい。ただ「價原」において述べられてゐるところと異なる點又は擴充するに役立つと思ふ二三の點について述ぶるに止めたいと思ふ。

梅園は前述の如く金銀尊重の弊を認め、富家兼併の害を力說してはゐるが、決して商業を排斥してゐるのではない。又當時一般にその差別が認められつつあつた天下と、一藩との經濟の違ひも認めてゐる。

「國（藩）を治め候と天下を治め候と差別可有御座候、天下の事は國を治め候人の力の及ざる事に御座候へば、此費無據候、それに就て工夫をめぐらし度、」

「丙午封事」は勿論國卽ち藩の經濟に關するものである。

「たとへば當時天下の用、金銀おもく相成候類、徒黨嗷訴逃散手嚴敷被仰付候類、國守の力の所及に御座なく候、金銀の用おもく相成候に就ては此備をなし、」

貨幣經濟の發展が日本全體の勢ひである以上、これに對應する必要がある。

「さて一國切の路道は我領地を中くぼにし、外のうるほひは流れ込み、こなたの潤は出ざる樣專要に候、もし術惡候へば、國中のうるほひ他國に流散仕候、是困窮の基にて御座候、」

その方法としては國內の生産を潤澤ならしむるにある。

「御領內當時萬端の御入にて國用を被辨、偖其外地理未盡處を以て民間の潤澤と思召、封し被召置候處、御所置を以て利路を御開被下候はば、自然と國中御免下り候心持に相成可申候、」

領內における手工業の奬勵も亦貨幣經濟的意味において重要である。

「御領內職人少く無據他所へ金銀出申候、職人少き事治亂ともに御不益の御事に奉存候、治國の道農工商ひとつも缺ぐべからず候、職人大概事足り候上は、精巧を尊要と可仕事に御座候、精巧の細工國に出來候へば、他國の財貨招かずして國に入込候、」

領內の產業を盛んにして金銀を流入せしむることは、「價原」にいふところに從へば、むしろ遊民を多く生じ、弊害少なからざる筈である。然るに彼は封事においては、これを主張し、さらに進んで彼は富家の有用なることをさへ說

いてゐる。

「民間に兼幷の家有之事は古來忌候樣に申傳へ候得ども、當時は治亂ともに御用の者に御座候、百姓と申者は至て無甲斐ものに御座候へば、いかほど聚歛有之候ても、金銀御用立候ほどの義無御座候、今の兼併家は皆賣人にて御座、候兼併家なく候ては、まさかの御用は不辨候、百姓有付候御しむけ被遊候へば、自然と田地は百姓にかへり申候、百姓の有付御しむけ無御座候ては、無理に百姓に御返し候ても、又又兼幷の家に歸し候、さるに依て田地大家にかたむき候はそのままに被召置、百姓御有付被下度候、町人共には何とぞ十分手を伸し、大家出來、他領の財貨も流込、格別の大家にも相成候へば、御沙汰無御座候ても、御用に相立申度心生じ候て、願出候樣にも相成候、町人百姓と違ひ、常常の租稅無御座、平生休息仕居候へば、軍國の御用はかねて相心得居可申義、役人共兼て申聞け置度候、右の通りまさかの御用は彼等にてなく候ては辨不申候間、存分の商賣爲仕度候、存分を不仕候事は下に疑の心を生じ候故に御座候、疑心は平生御いじりつき候より、仕度存念も相やめ、商賣ちぢけ申候、御領内に世間に聞へ候ほどの大家出來候はば、國守の御面目にて御座候、何卒職人御仕立、町人はたらき出し候者、他領の金銀内にむかひ可申候、是有國者の富と可申候、」

兼幷の富家をますます大家たらしめ、商賣を自由に進展せしめよといふこの封事の文章は兼幷の弊害を極論した前掲の「價原」の一節と對比する時、同じ人の筆とは思はれぬくらゐ對蹠的なものである。梅園は一體何れを眞に主張せんと欲したのであらうか。

勿論前にも述べたやうに、これらは一藩の政策として論じたものである。一國の大勢が貨幣經濟に向つてゐる以上、一藩の方針はこれに順應するより外にない。この意味で梅園は商業發展を主張した。同じやうな例をわれわれは林子平にも發見する。町人を遊民なりとして罵倒した子平は、その仙臺藩への上書においては一種のマァカンチリズム的議論をなしてゐる。しかし梅園と子平とは必ずしも同じではない。子平は藩自身の商業的活動を強調してゐるが、梅園は前掲引用文の如く商人の自由な發展をむしろ主張してゐる。

かく梅園は「天下の用金銀おもく相成」しことを前提として、これらのことを主張してゐるのである。前掲の引用だけをみては、如何にも「價原」の所論と對蹠的に感ぜられるかも知れないが、封事の大部分は地方民政のために費されてゐるのである。その國害としてゐるものも、

「一、殺人の私曲奢侈權威にほこり候事

一、村中公事を好み、喧嘩口論を好み候者

一、盜賊博奕

一、遊民多き事」

であり、民政殖産に害ありと考へたものを掲げ、その富國の術といふのは領内産業關發の具體的の例である。要するに封事一篇は彼が本條として劈頭に掲ぐる利用厚生の道を明かにせんとするにあつたのである。

五

梅園の經濟論は當時としても著しく異色あるものではない。むしろ當時の知識層の多くの者が抱いてゐたところと大差ないであらう。然るに梅園の經濟論、特に貨幣論については明治三十八年五月、河上肇博士が「國家學會雜誌」第十九卷第五號に「三浦梅園の價原及本居宣長の玉くしげ別本に見はれたる貨幣論」を掲げて以來、明治四十三年六

月、福田德三博士の「ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論につきての愚考」を同じく「國家學會雜誌」第二十四卷第六號に掲載され（後に「福田德三經濟學全集」第三卷に「ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論」として若干訂正の上所收）、經濟學界の長老の推擧に依つて著しく有名となつた。

梅園が貨幣論において特に推賞せられる點をみると、第一に「惡幣盛ンニ世ニ行ハルレバ精金皆隱ル」の一句に依つて彼がグレッシャム法則の發見者であること、第二に梅園が「金銀ハ諸貨ニ易ヘテ用ユルヲ以テ其用トス」といひ、貨幣の貯藏の具としての役割に論及しなかつた點、又「楮鈔ニテモ飛錢ニテモスム者ナリ」としたことから貨幣論の素材價値を認めぬカルタル・テオリーの先驅者であるとすること、第三に梅園が一つの島における貨幣量の增加は價格と釣合ふことを述べた點を據げて、ボアギュベールの所論と比較し、數量說又は比例說（福田）を採用する者であること。大體以上の三點が梅園を貨幣論者として卓見を有する者と認め、「價原」をアダム・スミスの國富論の出づる三年前にあらはれた經濟論の名著であるとされたのである。

從つてその後においても、梅園はしばしば正統學派の經濟論者と比較されてゐる。例へば、

「梅園が、貧富の懸隔增大の原因を究めんとして、貨幣の性質の詳細なる吟味に及び、貨幣並に物價に關する諸々の卓見を示せる點は、同時代の經濟學者中に異彩を放てるものであつて、貨幣それ自身は富に非ずとするところ、アダム・スミスを彷彿たらしむるものがある。」（堀江保藏「三浦梅園集」解題八八頁）。

の如きはその一例である。

梅園がその鋭い觀察力を以つて當時の經濟狀態を洞察し、貨幣について多くの卓見を示したことは十分に認めてよい。しかしそれが西洋經濟學者の所說と似てゐるかどうかといふことは、あまり重要なこととは思はれない。第一のグレッシャム法則については、その例は太宰春臺その外にも認められ、單に現象形態の觀察に過ぎないことは、すでに多くの學者の指摘するところである。（增井幸雄「グレシヤムの法則と德川時代の經濟學會」（三田學會雜誌第十一卷第一號所載、前揭堀江氏七四—五頁等）。かかる片言隻句を捕へて、作者の思ひもかけぬ議論を引き出すことは、却つて思想史の正當の理解を誤り、その思想家の價値づけを不當なものとする惧れがある。

第二及び第三の點についても同樣なことがいはれる。貨幣卽ち金銀を流通の手段、所謂貨幣交換要具說とすることは、單に梅園が貨幣の作用を檢討して結論したものではなく、むしろ德川時代の儒者の經濟論中に一般にみられる貨幣論である。山鹿素行の「たから」の議論は前にも觸れて置いたが、元來儒者の經濟論は食貨の二つに分かれる。食は民生要用のものであり、幣は流通要用のものである。食においては土地から生產する財貨——主として穀物——を論じ、貨においては金銀錢の流通を論ずるのが普通である。（山鹿素行「山鹿語類」、太宰春臺「經濟錄」等參照）。梅園も大體この流れに從つて議論したに過ぎない。金・銀・錢・紙幣等は所謂「貨」に屬し、流通の面だけが採り上げられるのは當時として異常なことではない。これを以てカルタル・テオリーの先驅とか何とかいふのは、むしろ滑稽に近い。殊に梅園は春臺の「經濟錄」を讀んでゐる。卽ち彼は「價原」の中で當時の物價を述べ、「是春臺經濟錄ニヨル江府の米價也」と記してゐる。その外にも彼の實證的資料となつたものに「經濟錄」からの知識が多い。そして春臺は明かにその中で金銀錢を以つて貨とし、

「天下ヲ治ルニ、穀ヲ貴ビ貨ヲ賤シムルハ、古ノ善政也、先王ノ道也、穀ハ民ノ食物也、食ハ民ノ天也、一日モナクテ叶ハヌ物也、貨トハ金銀錢也、金銀ハ勝レタル寶ト、人每ニ思ヘドモ、飢タルトキ、金銀ヲ嚙デハ腹充タズ……然ルヲ愚ナル民ハ、米穀ヨリモ優レル寶ト思ヘルハ、金銀アレバ、米穀ハ求易シト思故也、治世ニハ交易賣買

ノ道、イヅクマデモ達スル故ニ、金銀サヘアレバ、米穀モ布帛モ即時ニ出來ル、又米穀ハ嵩高ク重キ物ナレバ、齎アリクニ勞煩ナリ、金銀ハ懐中ニ入腰ニ佩テ、百里千里ヲモ行キ、一握ニテ許多ノ用ヲ足ス物也、是ニ因テ世俗愚人ハ、コレニ過タル寶ハナキト思也」（春臺「經濟錄」卷五）。

と論じてゐる。これ前述の梅園の貨幣に關する觀察と同一ではないか。その他「價原」の所論は「經濟錄」に負ふところ多い。

元來梅園は「價原」においては單に上田養伯の問に應じて賃銀の動搖について說明し、貨幣論に及んだに過ぎない。深く貨幣の本質を檢討したわけではない。文中の一節を捕へて濫りに布衍する時は、時に論者の意向を間違つて解釋することになるばかりではなく、思想史研究の立場からみても無意味である。私は梅園の「價原」を何回か讀んでみたが、梅園としても傑作でないばかりでなく、德川時代の經濟書としても、特に名著とするほど高く評價し得ない者である。

ただ「價原」の所論のうち、私の特に注意を牽いた點は、人皆富まば傭作人少なく難儀ならんといふ疑問に對し、「今ノ癖ツキタルヨリミレバ」といつてゐる點と、「物ニハ居リ合ヒト云者アリ」といつてゐる點とである。彼は決して革進的論者ではない。勿論封建的社會觀念から脫却し得た者でもない。しかし彼は社會を客觀的に觀察する態度を常に維持してゐた。一部の梅園批評家には彼が兼幷豪富の徒を攻擊し非難したといふ者もある。勿論梅園はこれらの者が遊民となり、「民ノ風ニ梳リ雨ニ沐ヒ、星ニ耕シ露ニ耘リシ膏血ヲ文彩刻鏤音技巧ノ用ニ貪リ盡」すことをよしとはみてゐない。しかし彼は貨幣經濟の發展――金銀尊重の結果はさうなるものとみた。從つて「封事」にあらはれたやうな前述の豪家維持の議論も出て來る。私はここで彼の主著たる「玄語」における發展論を述べる必要はないと思ふが少なくとも劈頭に說明した彼の學問的態度は「價原」の如き經濟論にも維持されてゐることを注意したい。至るところに彼は歷史的事實を擧げて證據としてはゐるが、それらは必ずしも適當な檢討を經たものではない。それよりも彼の議論の態度そのものが客觀的であることである。そして人間社會における內的法則を認め、それはしばしばつり合とか、居り合とかいふ言葉で表現されてゐる。基本的に正しい改革が行なはれ、その結果人が苦しむといふことは、本來ならばあり得ないことであるが、現實の問題としてはあり得る。今の癖に捕はるる時は現實の苦痛ともならう。しかし結局において正しく居り合ひがつくと彼は觀察する。

梅園は普遍的な「理」を考へてゐる。しかし「理」は「理」だけでは實現しない。實現するものは「氣」や「機」や「勢」の限定を受けて「故」として現れる。「理」と「故」とは相反し、矛盾する。「故」は限定されたものである。しかし「故」は「理」を含み、「理」は「故」に由る。眞實を明かにせんと欲するならば、兩者を區別して把握しなければならない。かうした梅園の「玄語」における思考が十分に「價原」の所論のうちに現れてゐるとは思はない。ただ混沌たる現實の社會を論じつつも、多少なりとも彼がそこに「理」を認め、その限定された「故」――史的現象から、これを把握せんとした形跡を窺ひ得るのみである。

（昭和二十三年七月二十日稿）